

はしがき

本書は、現代日本の生活保護制度における変動を描き出すことを課題としている。

1990年代半ばに底をついた生活保護受給者数は、以後一変し、急激な増加をしている。この受給者の急増を背景に、生活保護制度では改革が進行している。制度改革の主要なものとしては、2005年からの自立支援の導入と2013年の生活保護法の改正があげられる。本書は主に自立支援を取り上げる。

生活保護制度は、最低限度の生活の保障を目的とする制度であるとともに、「自立の助長」も目的とする制度である。

そして、生活保護制度は、「補足性」という基本的性格をもつ。現代社会は、「自己責任の原則」を基本原則としており、生活保護制度では、生活に困窮する者に「自分の力で社会生活をいとなむこと」つまり自助を求める。さらに、扶養義務者による扶養の優先を求め、なお足りない部分を補足するというのが生活保護制度の役割である。しかも、保護の要否は「世帯」を単位に判断する。したがって、生活保護制度では、個人および世帯単位での自助と、扶養義務者の扶養の優先が求められる。そこで、生活保護受給者および世帯の自助と扶養に着目し、生活保護制度の変動を検討する。

自立支援は、2005年から生活保護に導入され、生活保護制度に大きな転換をもたらした。まず、自立支援は生活保護に新しい自立概念を提示した。そして、自立支援の展開過程では、地域生活支援や民間委託という新しい動きが生まれている。本書では、そうした生活保護受給者に対する自立支援の導入から展開の過程についての検討に加え、自助の単位となる世帯の認定と扶養義務者の扶養における変化にも分析を加える。

以下本書では、序章、終章の間に7章をおいている。序章では、本書の意図と方法を記し、貧困・社会保障・社会保険と生活保護の関係について整理・確認する。ついで、第1章では、生活保護政策の展開と生活保護受給の変化に着

目し生活保護の動態を検討する。

第Ⅰ部・第Ⅱ部は、それぞれに2つの章をおき、自立支援の導入から現在に至るまでの展開の過程を取り上げ、そこに生起する生活保護の変化を指摘する。第Ⅰ部では、生活保護制度における自立概念、自立支援および自立支援プログラムの理念や方法について検討する。第Ⅱ部では、自立支援政策が展開される中、生活保護において新たに試みられている「生活保護受給者の地域生活支援」と「民間委託」の動向を考察する。

第Ⅲ部の2つの章では、生活保護における受給の単位である世帯と世帯認定および扶養義務の取扱いを検討する。最後に、終章では、近年の生活保護制度における変化をまとめ、生活保護制度における課題を指摘する。